

人であう奏

vol.88

言葉と文化を超えて、支え合う力

かど わき **門脇 エニータ** さん（山形市）

1974年インドネシア・スマトラ島生まれ、山形市在住。2000年来日し、翌年に「山形インドネシア協会」を継承。以来、山形県内を中心にインドネシア人技能実習生の語学指導や生活支援を実施。インドネシア人技能実習生の育成を目的とした機関を設立し、実習生と受け入れ企業をつなぐ架け橋として活動を続けている。



山形花笠まつりをはじめ地域の祭りや交流イベントに山形インドネシア協会として参加し、インドネシア文化の発信のほか、外国人と地域住民との交流促進に努めている。互いを理解し、地域の一員として共に暮らす関係づくりを大切に活動している。

長年、ボランティアで外国出身者との交流を続けてきた笹原智子さんと、海外にルーツを持ち、外国出身者の生活支援などを行う門脇エニータさんに、言葉と文化を超えて支え合う地域のあり方についてお話を聞きました。



きさ はら とも こ **笹原 智子** さん（山形市）

1979年山形市生まれ、同市在住。長期に渡り国際交流事業に協力し、フィジー、スペイン、ベトナムなどからの短期のホームステイを受け入れている。2020年9月に「在山形ベトナム人協会」を設立し、定期的な日本語教室や、山形の生活や文化に慣れ親しんでもらうための体験イベントなどを開催。フルタイムで働く傍ら、支援活動が続いている。



高畠町国際交流協会の協力のもと、ベトナム人技能実習生から伝統料理「パインセオ」を学び、バーベキューやゲームなどを楽しむ異文化交流イベントを実施。季節ごとにイベントを企画し、相互の文化理解と親睦を深める場を提供している。

外国出身者と地域のかけ橋

「山形で暮らすインドネシア人技能実習生の支援活動を行う原点には、人との出会いがありました」。

そう話すのは、インドネシア出身の門脇さん。26年前に来日し、山形で暮らす中で、多くの地域の人たちに支えられてきたと言います。

「振り返れば、日々の小さな出会いの積み重ねが、今の私をつくってくれました。この活動を始めたのも、その恩返しをしたいという思いからです」。

「私が助けてもらったから、今度は私が助けたい。それだけなのです。」と門脇さんは言います。

一方、笹原さんが県内在住の外国出身者を対象に日本語教室などの活動を始めたきっかけは、山形で暮らす外国人労働者の現状を知ったことでした。

「遠い国から、わざわざ山形を選んで来てくれた人たちに、一市民として何かできないだろうかと思ったのが始まりでした。長年ホームステ

イを受け入れてきましたが、外国出身者だからと特別に意識することは

ありません。生まれ育った国は違っても、みんな同じ人間。支援する側、

される側ではなく、お互いを理解し合うことを大切にしています。」と

笹原さんが言います。

同じ地域で暮らす仲間として

「外国人」という言葉を意識しすぎることで、かえって心の距離が生まれてしまうのかもしれない」。

門脇さんの率直な言葉に、笹原さんは大きくうなずき、応えます。

「関わる機会が増えれば、自然と同じ目線で接するようになるものです。日本語教室でも、相手に伝わる日本語を選ぶだけで、コミュニケーションは大きく変わります」。

門脇さんが続けます。

「お金を目的とするならば、今、日本は選ばれません。日本の文化は唯一のもので、これを身に付けることが、その後の生活を豊かにすると考えて来ています。だからこそ、山形の方にも外国出身者と関わる機会

を持つてもらいたいです」。

関わりを増やせば心の距離が縮まる

笹原さんは、ホームステイの参加者を実家の畑へ案内したときのことを振り返ります。

「最初は戸惑っていた両親も、畑仕事を一緒にするうちに、あなたの国はどんなところなの？ など、自分から積極的に話しかけるようになっていました。また、畑近くの農家さんと話す機会があり、野菜を持たせてくれたりと、コミュニケーションの輪は少しずつ地域へ広がっていききました」。

門脇さんが続けます。

「声をかけること。一緒に働き、食卓を囲むこと。そんな何気ない時間が、人と人との距離を少しずつ縮め、地域の空気も変えていくのではないでしょうか」。

その言葉に笹原さんがうなずき、応えます。「関わりを持ち続けると、外国人というフィルターがはずれ、フラットな関係になりますね」。

交流が生む理解やつながり、違いを超えた社会へ

「約束をしなくても、行けば誰かに会える。そんな場所を山形につくりたいと思っています。私自身、家族だけでなく地域の人たちが当たり前のように出入りする家で育ち、多くの人との関わりの中で成長してきました。そのようなつながりを、山形にも広げていきたいと考えています。」と門脇さんは話します。

笹原さんが続けます。

「山形で暮らす若い人たちと外国から働きに来ている人たちとの交流の場をもっと作っていききたいと思っています。若い頃から異文化に触れることで、互いを理解し尊重し合える、そうした気持ち自然に育まれ、根付いていくと思います」。

異なる文化や言葉を持つ人との出会いや交流。その積み重ねが、特別ではないこととして地域に根づいたとき、国籍や立場、考え方の違いを超えてすべての人が安心して暮らせる社会になっていくのかもしれない。